



.....
 監督＝チャールズ・ストーン三世／音楽製作総指揮＝ダラス・オースティン／出演＝ニック・キャノン／ゾーイ・サルダナ／オーランド・ジョーンズ／レナード・ロバーツ（20世紀フォックス映画配給／2002年アメリカ映画／119分）

スポーツ競技の12分間のハーフタイムに大学対抗で繰り広げられるマーチング・バンドの闘い。これは楽器を武器にした格闘技だ。黒人特有の、ものすごいリズム感に酔いしれることまちがいなし。

🎺 マーチング・バンド

「ドラムライン」のCDの解説書によると、「ショー・スタイルのマーチング・バンドの歴史は、フロリダ州タラハシーのフロリダA & M大学（FAMU）という黒人大学で、50年以上前に始まった」とされている。そして、「スポーツ競技の12分間のハーフタイムに、全米の大学から選抜されたマーチング・バンドが、バンド・バトルの優勝を賭けて、究極の妙技を競い合う」姿を描いたのが、この映画だ。前年の優勝校は、モーリス・ブラウン大学。これに挑戦するのがリー監督（オーランド・ジョーンズ）率いるアトランタのA & T大学。この2つのマーチング・バンドの対決は、すばらしいのひとこと。

🎺 私の鼓笛隊の体験

私は、小学校時代、4年生から合唱部に入り、「ウィーン少年合唱団」のようなボーイソプラノの美しい(?)声で歌っていた。いつも予選で敗退していたものの、小学校対抗の合唱コンクールにも団体で参加していたほどだ。もちろん、その時代には楽しい合宿もあった。そんな小学生の時、はじめての体験として、

松山市で鼓笛隊のパレードをやることになり、多くの小学校がこれに参加した。私はこの時、先頭の指揮杖をもった指揮者役。「ピーピ。ピッ、ピッ、ピッ」と最初に笛を吹いて、左手を腰におき、右手で指揮杖を振って、後続する鼓笛隊を指揮、先導する大切な役だ。曲はもちろん「錨を上げて」。時々テレビで見る、自衛隊などの鼓笛隊によるパレードと同じヤツ。あれの小学校版だ。この鼓笛隊の行進の時に使う楽器が、太太鼓と小太鼓。「マーチング・バンド」は、いわば、そのはるかかなたの延長線にある、究極のパフォーマンス。黒人特有のリズム感がなければ、とてもモノにすることのできないしろものだ。

主人公は天才的なマーチングドラマー

主人公のデヴォン（ニック・キャノン）は母親の手1つで育てられたが、別れた父親の音楽の才能を引き継いだ天才的なマーチングドラマー。

リー監督は、このデヴォンを音楽特待生として、A & T大学にスカウトした。しかし、A & T大学のマーチング・バンドチームの信条は、「バンドは1つ、音楽も1つ」。だから、いくら天才的な技能の持ち主であっても、自己中心的で、チームの和を乱す者はいない。そこで繰り広げられるのが、リーダーのショーン（レナード・ロバーツ）とデヴォンの確執。しかし、そんなデヴォンの魅力と才能を信じ、デヴォンを支えるのは、最初からデヴォンの「ナンパ」に乗ったレイラ（ゾーイ・サルダナ）。ストーリーらしいストーリーはこれだけだが、これで十分。何しろ、すごいパフォーマンスに酔いしれればいだけだから。

ダラス・オースティンの自伝

この映画の音楽製作を総指揮したのは、あの『風と共に去りぬ』（39年）で有名となった南部のまちアトランタを故郷にもつ、音楽界の巨匠ダラス・オースティン。彼は、アトランタの高校で、ドラムラインの奏者をしていた体験を持っているとのこと。だから、自らの実体験をベースにし、若い時の自分の姿をデヴォンに重ねてつくったのが、この映画というわけだ。こんな話も、一応の知識として頭に入れておけばいい。とにかく、今まで見たことがないような、ドラムラインのパフォーマンスを体験してみよう。 2004(平成16)年1月27日記